

日本語と中国語の誤用例研究—先行研究の考察と展望—

藤田昌志

日语和汉语双方向的偏误研究

FUJITA Masashi

【摘要】

本文考察有关日语和汉语双方向先行偏误研究。日本人学汉语的人数增加起来，中国人学日语的人数也增加起来。我们能预测将来日本人给中国人教日语、中国人给日本人教汉语的机会多起来。这时，日本人学好日本语言学，中国人也学好汉语语言学，才能获得卓越的成果。没学好自己母语、外语两方面的语言学，成果就很小。我们考察双方向的先行偏误研究，开阔语言世界，才能给像两个前后座的双座自行车似的外语学习做出很大的贡献。

キーワード: 日本語誤用例研究、中国語誤用例研究、タンデム方式語学学習法、談話レベルの誤用例研究、『日中対照表現論』

一、序に代えて

本「日本語と中国語の誤用例研究—先行研究の考察と展望—」は日本語誤用例研究、中国語誤用例研究の両方を扱う。本稿は今後の日本語・中国語双方向からの誤用例研究の発展に寄与することを目的とするものである。具体的構成は以下のものである。

一、序に代えて

二、日本語誤用例研究の先行研究の考察と展望

三、中国語誤用例研究の先行研究(学習実用書を含む)の考察と展望

四、結語

[注]

[引用文献・参考文献]

日本語誤用例研究、中国語誤用例研究の両方を一つの視野に入れて研究を行うのは日本語母語中国語学習者(この際の「日本語母語中国語学習者」とは広く日本語話者の中国語学習者まで含む。以下同じ。)と中国語母語日本語学習者の増大が並行的に見られ、その傾向

は今後も増大していくと予想されるからである。また、その際、日本人が中国人に日本語を教え、中国人が日本人に中国語を教える機会も多くなることであろう。その際、従来、タンデム方式語学学習法(das Tandem:語学学習の二人乗り。たとえば、二人一組のペアで、日本人が中国人に日本語を教え、中国人が日本人に中国語を教えるという形の語学学習法。)がさほどの効果をあげなかったように見受けられるのは、日本人が日本語学についての知識を持たず、中国人も中国語学についての知識を持っていなかったことに帰因するように考えられる。母語について native speaker として言語環境を提供する場合(たとえば日本人が中国人に言語サポーターとして日本語を話してその中国人の話し相手となる場合)、少なくとも当該言語サポーターの母語についての基礎知識と相手がどういう誤用傾向があるかについてを知っておくことは、ただ話し相手となるだけの言語サポートとは比較にならない効果をあげるものと考えられる。本双方向の誤用例研究にはそうした大きな意義が存在する。これこそが「国際化時代」の新分野の研究ではないかと筆者は考えている。

日本語誤用例研究には①日本国内における日本語誤用例研究と②外国(本研究では中国を取り扱う)における日本語誤用例研究がある。また、③学習者の母語を限定しない一般的な誤用研究、特徴を探る日本語誤用研究と④特定母語(本稿の場合は中国語)話者による日本語誤用例研究がある。本研究では①と④を中心とした研究を行うことを事前にことわっておく。(実際の記述は古い年代から新しい年代への順で行う。①と②は分けるが③と④は分けない。)それは「日本語と中国語」を対象とし、著者が日本在住の日本人であることに帰因する。中国語誤用例研究についても同様のことが言える。(①'日本国内における中国語誤用例研究と④日本語話者による中国語誤用例研究を中心にして行う。)

従来は別々に行われてきた誤用例研究が一つの視野のもとに行われることは、日本語学習、中国語学習の双方に刺激を与え、各言語の研究、学習に新しい地平を開くことに通じるように思う。(なお誤用例分析の基準等については拙著(2007)『日中対照表現論一付:中国語を母語とする日本語学習者の誤用について一』白帝社刊を一読いただければ、より理解が深まるものと思われる。大方のご理解をお願いしたい)。

二、日本語誤用例研究の先行研究の考察と展望

まず、先行研究の考察から始める。この30年間の日本国内における日本語誤用例研究の嚆矢は(1978)『日本語教育』34号(日本語教育学会)の「文法上の誤用例から何を学ぶか」という特集であると言っても過言ではない。この特集に収められた6編の論文(鈴木(1978)「格助詞を中心として」、吉川(1978)「誤用例による研究の意義と方法」、佐治(1978)

「誤用例の検討—その一例—」、遠藤(1978)「作文における誤用例—モスクワ大学の場合」、宮崎(1978)「誤用例をヒントに教授法を考える」、茅野・仁科(1978)「学生の誤用例の分析と教授法への応用」)は今後の日本語誤用例研究の方向性を示したと言える⁽¹⁾。その方向は二つに分けられる。それは①日本語学関係に属するもの((鈴木(1978)、佐治(1978)、遠藤(1978)の3編)と②日本語教育習得関係に属するもの(吉川(1978)、宮崎(1978)、茅野・仁科(1978)の3編)の二つである。それらは研究分野における二分類と一致している。

佐治(1978)は外国人学習者の日本語誤用例を検討していると、(1)日本語教授法への反省(2)学習者の母語の言語、習慣、文化などと日本のそれとの対照研究(3)日本語内部のより深い研究とその結果の整理された記述などの問題が浮かび上がってくるが、そうした検討を回を重ね、ねばり強く続けていくことによって「誤用の一般的傾向や母国語別の傾向、教授者側が研究、整理すべき問題のリストなどが、次第に明らかになっていくだろうと期待している」(佐治(1978.2)「誤用例の検討—その一例—」⁽²⁾)と述べている。この「誤用の一般的傾向」・「母国語別の傾向」・「研究、整理すべき問題のリスト」の明確化は重要な指摘である。

『日本語学』が1982年11月号から5年にわたり、複数の研究者(吉川(1982-1983)、森田(1983-1984)、水谷(1984)、稲垣(1985)、宮崎・新屋(1985-1986)、大曾(1986-1987)、田窪(1987))による誤用分析研究を掲載した。それは日本語誤用研究ブームをよんだ。吉川(1982-1983)「誤用例による研究の意義と方法」は「誤用の原因」を①母語の干渉②以前にならった外国語の干渉③それまでに習った日本語事項の影響④不十分な理解⑤不十分な説明⑥類推のはずれ——という6種類に分ける。森田はのちに「過去に集めた誤用例の中から文法、意味に関するものを補充し、同じ形式で分析記述したもの」を森田(1985)『誤用例の分析と研究—日本語学への提言—』明治書院として出版する。誤用例の分析によって現実の日本語教育の質を高めることに役立ったと言うより、日本語そのものの諸問題の明確化や日本語研究への注文、問題提議としての一定の基礎的意義、日本語学の発展への寄与が大きかったと言えよう。

佐治圭三氏は日本や中国の雑誌に発表した誤用関係の論文をまとめて1992年、『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房として出版した。これも日本語学からのアプローチである。中国人学習者の誤用例を多くとりあげていることと類義語・類義表現をとりあげその相違を説明しているのが特徴である。中国人学習者の誤用例については中国語との対照がないのが惜しまれるが、佐治氏の対照研究への指針とも言える次の言辭は今、読んでもきわめて示唆的である。「対照研究が効果を持つためには、両方の言語におけるその問題が、それぞれの言語の内部において、その言語の論理に即した形で、最も深

い部分まで掘り下げられ、本質にまで達している必要がある。今後そういった方向での対照研究が発展することを願ってやまない。」⁽⁹⁾。日本語へのモダリティー面からの一貫した体系的アプローチ、「ている」や「てしまう」のモダリティー性の研究、中国語のモダリティー表現の非明示性を埋めるものについての研究などは今後、日中対照研究で深めていかなければいけない研究課題であろう。

市川保子 (1997)『日本語誤用例文小辞典』にほんごの凡人社 同 (2000)『続日本語誤用例文小辞典』同 は日本語の言語体系に沿って分類された、誤用例研究書である。前者はムード、テンス、アスペクト、ヴォイスなどの文法的カテゴリーによって分け、単文レベルに見られる項目を中心としたもので、後者は接続詞、副詞などの談話レベルの誤用を主に取り扱っている。各 1000 以上の豊富な数の誤用例をあげている。

張麟声 (2001)『日本語教育のための誤用分析——中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク は「中国語話者に見られる文法的誤用の傾向の一部を 20 のトピックに絞ってまとめたもの (まえがき iv) である。第二言語習得研究の三段階—— (1) 対照分析(2)誤用分析(3)中間言語分析——の一段階として誤用分析を位置づける。(3)中間言語分析が総合的研究であるのに対して、(2)誤用分析を個別分析として、母語転移 (正の転移と負の転移) を解明する立場に立っている。日中語間の「名詞のランキング」の相違によって中国語話者の日本語受動文の表現に誤用が生じること、中国語は間接目的語 (日) の主語型受動文の「回避」を行うために、中国語話者の日本語表現に限界が見られること⁽⁴⁾など明晰な誤用例分析が行われている。もっとも「母語転移」のみに焦点を絞るのは問題があると言える。拙著 (2007) の「加訳」「減訳」概念で説明できることも多い。誤用例は「母語転移」のみによって起こるのでもない。拙稿で明らかになった「混乱による誤用」等によっても起こる。^{ダイカマス}二分法的方法の是非も問われなければならない。

市川保子 (2010)『日本語誤用辞典—外国語学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント—』スリーエーネットワーク は見出し項目 170、誤用例文数 2720。日本語学習者の作文、テスト解答文、会話やディスカッションから誤用を収集し、誤用から得た貴重なヒントから日本語理解や指導のポイントをまとめてある。誤用例一般を扱う辞典である。

日本語誤用例研究について長友 (1993) は「これらの一連の誤用分析 (古川 1882-1983、森田 1983-1984、水谷 1984、稲垣 1985、宮崎・新屋 1985-1986、大曾 1986-1987、田窪 1987 と小林典子 1987、市川 1989、1990、小金丸 1990a,b、葉 1990、佐治 1991 などを指している——王忻(2008)p.10 注による) が言語習得論とむすびついた誤用分析の方向性を一切うちだせなかったというマイナスの側面も指摘せざるをえない。」「その後の日本語

の中間言語研究の発展をおくらす要因になったのではないかとおもわれる。」(長友(1993)『日本語の中間言語研究—概観—』『日本語教育』81 日本語教育学会所収 pp.1-18のうち p.8)と述べているが、それは言語習得論を証明する手段の位置に誤用分析を置く考えと言わざるをえない。「誤用研究は必ず習得研究の中におさめられるとは筆者にはどうも認めかねる。要するに二つの研究はそれぞれの自分の体系をなしており、目標と方法も違う。」(王忻(2008)p.10)、長友(1993)の指摘は「納得できない」(王忻(2008)p.10)という識者の意見も出されている。

次に中国における日本語誤用例の先行研究(出版された書籍を中心に扱う)について述べる。中国における日本語誤用例研究は1980年頃に始まったが、①日本語研究者の数が少ないこと②研究成果を発表する場が現在、学習者向けの『日语知识』と『日语学习与研究』(1979年創刊)しかない(もう一つの『日语学习』は1990年に廃刊)こと等の理由により、隆盛期を迎えずに「勢いがなくなってきた」という指摘もある⁵⁾。もっとも近年は漢日対比語言学研究会も発足し、活動を行っているから、これから隆盛期を迎えるかもしれない⁶⁾。

『日语学习与研究』が1983年1月号から1985年6月号まで13回にわたって連載した佐治圭三(・劉金才・郭勝華)(1983-1984)「誤用例の検討——動詞の誤用例」は中国における誤用例研究の嚆矢と言える。文字通り動詞を中心としたもので、代表者の佐治は後に佐治(1992)としてその内容を収めたものを日本で出版した(既述)。

胡振平(1986)『日语部析二百例(日本語誤用文分析二百例)』上海译文出版社は中国人自ら完成させた早期の誤用例研究の成果で、200の誤用例を文法、表現、語彙の三つの「あやまり」に分け、助詞、可能態、慣用表現、接続関係などの下位分類を設けている。

穂積晃子著、顧海根・李強訳(1987)『中国人学日语常見病句分析一百例』科学普及出版社(台湾版に同(中華民國79)『中國人學日語常見病句分析一百例』笛藤出版がある。)は、日本語教師の手になるもので、誤用例分類はあいさつから副詞性詞語、指示代名詞、ハトガ、条件の表現方式、時態(アスペクト)、敬語、文体など17種類ある。1981年から1983年まで著者が中国の大学で教えたときの学生の作文から収集した誤用例をもとにしている。

『日语知识』に1989年5月号から12月号まで青蘭編「正誤辨析」が連載された。初級の事項が多い。1990年、12回にわたり森田(1985)の一部が張青藍編訳『病句分析与研究』として掲載された。

徐宝妹・許慈恵(1995)『留日学生日语错句解析』上海外語教育出版社は中国人の手になるもので、600余りの誤用例をとりあげて分量が多いのが特徴と言える。

王忻 (2008) 『中国日语学習者偏誤分析』 外语教学与研究出版社 は第一部 序論 誤用の概説、第二部 誤用の分析(一)語彙編、 第三部 誤用の分析(二) 文法編、 第四部 結び 誤用の体系 から成る。中国人による日本語の誤用を体系的にとらえようとする力作である。

今後の中国における日本語誤用例研究は 漢日対比語言学研究会 の発展とともに隆盛に向かうことが期待される。日本における日本語話者を中心とする中国語学習者の増大は今後も継続するものと考えられる。その**中国語学習者が中国語話者の日本語誤用例に興味を持ち、中国語学、日本語学両方の知識を持つようになれば、日本語誤用例研究は広がり**と深さを持つようになるであろう。それは**タンデム方式の語学学習を実りあるものにするための方向性を持つもの**と言えよう。

三、中国語誤用例研究の先行研究の考察と展望

日本国内における中国語誤用例研究の先行研究 (日本国内で出版された書籍を中心として行う。研究というより実用的学習書が多いが、それも日本国内における中国語誤用例研究のあり方、傾向、特徴と考えられるので、そうした理解のもとに日本で出版された書籍を中心として取り扱う。) の嚆矢は、この 30~40 年間について言えば、呂才楨・戴惠本・賈永芬著 荒屋勸編 (昭和 61 (1986)) 『日本人の誤りやすい中国語表現 300 例』 光生館である。北京語言学院(当時)の三人の中国語教師が収集した(日本人)留学生の誤訳例 1300 の中から約 300 の(誤訳)例文を選び、それらについて [訂正] 文と解説を付けたものである。先駆的な中国語誤用例研究の書である。中国語の参考書の中で作文に関するものが少ない実情(当時)に鑑みて、作成した⁽⁷⁾とのことである。全体はアルファベット順に項目が “爱 ツi” から “做梦 zuホ m=ng” まで配列されている。語と語の“搭配”(結びつき)関係の誤り、“動賓”(動詞+目的語)構造のため目的語を伴えないことによる誤り、統語上必要とされる要素が欠けているための誤り(ex.中国語受身文が動詞の後ろに完成、結果を表す語を必要とするのにそれがない場合などの誤り)、ある副詞が否定文には使えないのに否定文に使用した誤り(ex. “到底”)等学習上注意しなければならない点に言及しているのは画期的であった。日本語母語話者の中国語学習上の誤用に焦点を当てたことの先駆的意義は大きい。ただ惜しむらくは体系生がない既述のために、記憶に留まることが少ない。談話レベル(discourse level)の誤用についての言及がほとんどないのも問題である。

岡部謙治編著 (1990) 『この中国語はなぜ誤りか』 1982-1983 光生館 は中級段階への橋渡しをし、初級項目の整理⁽⁸⁾を目論んで作成された書であり、著者の 10 年間の中国語教育の中から生まれたものである。項目は 1. “二” と “两” ~ 92.動詞のくりかえし ま

であり、各項目は〔日語〕〔誤訳〕〔訂正〕〔理由〕〔誤用例〕〔正解〕〔補説〕という構成をとっている。中国語誤用例は実際に収集したと言うより、文法項目、文法項目の用法をマスターするために作成したような感もある。〔誤用例〕は各5個程度、豊富に提示しているが、その〔正解〕を見てもあまり臨場感、驚きがないことからそのようなイメージを持つ。中国語文法項目マスターのために作成された書籍である。

来思平+相原茂 喜多山幸子編訳(1993)『日本人の中国語——誤訳例54例』東方書店 は北京語言学院(当時)の中国語教師である来思平氏が収集した「日本人の誤用例」を相原氏が来思平氏(氏は日本語に通じておらず、なぜ日本人がこのような誤用を犯すのかの要因説明については相原氏や編訳者(喜多山幸子氏)が担当した⁹⁾と会合を重ね合宿を行って、共通の原因と判断される誤用例をひとまとまりにし、それを case1 から case54 まで、症例ごとに分類・整理し、処方をくだし、練習を付した(同)ものである。編訳者の喜多山氏はそれらを調査・整理の上、原稿として完成させたので第三の著者であると相原氏は言う¹⁰⁾。case は“着”“正在”“了”、モダリティを表すもの、使役文、口語か書面語か 等に分かれ、文法的な見出しがほとんどで、二文以上のレベル、すなわち談話レベルのものはほとんどないが、そのことは現在の中国語誤用例研究でも変わらない。日本語誤用例研究とのコラボ(協力)、日本語誤用例研究まで視野に入れた中国語誤用例研究が必要とされるゆえんである。

中山時子・佐藤光・趙閻先著(1997)『中国語表現300例——日本人の発想・中国人の発想』東方書店 は「作文体による中国語の表現例」(序 iii)で、本文の各文例にはすべて(a)日本人による中国文(翻訳文)(b)中国人による中国文(同)が付されている。中山氏は中山時子・佐藤光・趙閻先著(1997)『中国語表現300例——日本人の発想・中国人の発想』東方書店「(a)の中国文は日本人の発想、(b)の中国文はこれこそ中国的発想と言えましょう」(序 iv)と述べている。本書は文法の「正誤」「grammaticalness」と言うより「適切さ」「appropriateness」に焦点を当てて(a)(b)の相違を探ろうとした意欲的な書である。惜しむらくは(a)と(b)の相違についての説明が不足しているので、当初の目的が達成されていない嫌いがある。しかし、中国語誤用文と中国語らしい中国語文の間の、日本人的中国語文について気づかされる書である。

張起旺著/児玉充代訳(2001.3)『日本人の間違えやすい中国語』国書刊行会 は文法の誤用例のみを扱う。350の誤用例を第一章 実詞の誤り分析 第二章 虚詞の誤り分析に分ける。更に前者は名詞、動詞、形容詞、数詞の各誤りに、後者は介詞、副詞、連詞(接続詞)の各誤りに分けられている。1.誤用文の訂正、2.分析、3.練習——の各部分から成っている。語と語の“搭配”(組み合わせ)や類義語との相違の説明が多く、誤用例について

の「古典的」な記述方法である。談話レベルの誤用例は全く扱われていない。

郭春貴 (2001.11) 『誤用から学ぶ中国語』 白帝社 は初級、中級段階で学生がよく起こす誤用のタイプを 100 例選んで、動詞、形容詞、名詞、方位詞と場所詞、量詞、助詞、副詞、介詞、連詞、疑問詞、補語、多義語の 12 章に分けて、その用法を説明したもの（まえがき）である。主眼は誤用例分析と言うよりは、「初、中級の中国語の用法を説明しながら、習った文法を課分からもう一度復習するような形」（同）で初、中級の中国語をマスターすることにある。この本も文法項目に偏っていて談話レベルのものは全く扱っていない。

以上、この 30～40 年間の日本国内における中国語誤用例研究の先行書（市販のもの。研究と言うより実用書と言った方がよいものが多いが、誤用例研究自体、実際的な、誤用文の産出を少なくすることと密接な関係があることを理解し、研究の範囲を広く考えていただきたい。）について概説したが、いずれも中国語文法項目についての説明と例文の提示が主眼になっている感が強い。日本語と中国語の緊張関係はない。このことは中国語作文の教科書が多くの場合、目標とする中国語の文を日本語に訳して提示し、更にその元の中国語を学ぶ形でしか作成されていないのと類似の問題点である。中国語の土俵の中でしか「言語」（この場合、中国語）が語られていない。そこには対照研究の視点がない。言語のヒエラルキー（階級制、階層性）は超克されていない。

次に中国における中国語誤用例の先行研究（出版された書籍を中心に行う。日本国内のものよりは研究的である。）について述べる。

佟慧君 (1986) 『外国人学汉语病句分析』 北京語言学院出版社 は岡部 (1990) の参考書籍としてあげられているが、英語、仏語、ドイツ語、日本語、スペイン語、朝鮮語、ベトナム語を母語とする留学生の中国語誤用例 2020 を収集し、中国国内の中国語教師（中国人に中国語を教える教師と外国人留学生に中国語を教える教師）の便に供するために作成された⁽¹¹⁾。一頁の左側（左段）に誤用例を、右側（右段）に正しい文を数例（3～10）提示し、一頁の下に“説明”が付してある。全体は“詞”と“句子”の二つに分かれ、“詞”には名詞、代詞、数詞、量詞、形容詞、動詞などが、“句子”には主謂句、特殊的動詞謂語句、“是……的”句などが下位分類されている。誤用例と正しい中国語を対照的に一頁の左右に提示し、誤用について“説明”の部分で簡潔に説明してある実践的な、中国国内の中国語教師用の研究書、実用書である。

狄昌運編 岡田勝訳 (1996) 『怎样说得对?——日本人汉语学习中常见语法错误辨析』 北京語言学院出版社 は日本人学生の中国語誤用例について説明したものである（日本語訳あり）が、日本語学と中国語学両方の視野がないために日本人学生の中国語誤用の指摘と正しい中国語文の提示に終始している感をぬぐいされない。

叶盼雲 吳中偉編 (1999)『外国人学汉语难点释疑』北京語言文化大学出版社 は外国人留学生の中国語誤用例一般について 228 項目に分けて、説明したものである。たとえば 1.“先生”と“老师” では最初に [要点提示] (すべてに共通する) として「人に自分の先生を紹介するときには“他是我的先生。” (「彼は私の“先生”(xiansheng) です。」と言ってはならない。))と記してあり、次に説明が述べられている。外国人留学生で中国語学習者のための実用書である。

楊徳峰(2008)『日本人学汉语常见语法错误释疑』商務印書館 は4つの章と“附录”から成り、第一章“词语学习中常见的错误”(“词语”(=単語)学习上よく見受ける誤用)は名詞、動詞、形容詞、代詞、数詞、量詞、副詞、介詞、連詞、助詞に下位分類した誤用例を扱う。第二章は“句子成分”(=文成分)、第三章は“句子”(=文)、第四章は“篇章”(=文章)、“附录”は“标点符号”(=句点や読点)の誤用例を扱う。各項目の記述は“誤”“正”の“例句”(=例文)、“分析”をワンセットとし、基本とする。関連事項について“链接”(リンク)の記述を付する場合もある。

第四章“篇章学习中常见的语法错误”(「文章学习上、よく見受ける誤り)は実際は「文章」ではなく「文」の中での誤り(ex.「主語の過多」「主語の欠如」等)がほとんどであるが、一部、談話レベルのものを扱っているのは注意を引く。

以上、この 30~40 年の中国語誤用例研究の先行研究(書籍)について日本国内のものと中国で出版されたものを概観してきた。実際には誤用例研究と言うよりは、誤用例を提示し、それに対する正しい中国語を示し、その正しい理由、もとの誤用例の誤りの理由を文法項目(実詞、虚詞の下位分類)、アルファベット順、case などごとに分類し記述したものが多く、あくまで中国語学習の効果をあげるために誤用例を提示し、その誤りを正すことを主眼とするという特徴があるようである。そこには日本語と中国語の緊張関係はない。「英作文」が「英借文」であると言われるように「中国語作文」も「中国語借文」(それも一文レベルのみで二文以上の談話レベルに考察範囲を広げているものはほとんどない。)のテキストがほとんどである。対照研究の立場から日本語、中国語の関係を考察し、両言語の緊張関係の中で中国語誤用例研究を位置づけ、中国語誤用例研究の成果を実践的に具現化したテキストの作成が今後、望まれる。そうしなければ言語の「ヒエラルキー」(階級制、階層性)を超克することはできない。国際化時代の外国語学習は言語の「ヒエラルキー」を超克するものでなければ、容易に従来の言語のヒエラルキー」にからめとられてしまうであろう。そうした展望でこの章を終えることにしたい。

四、結語

以上、日本語誤用例研究、中国語誤用例研究について、それぞれ先行研究を考察し、展望を述べた。日本語、中国語の両誤用例研究をワンセットで行うところに新たな研究の地平が広がることを予感している。

日本で日本語教育受講者の60%以上を占める中国語話者に対して日本語教育を行う者も現状では中国語学を修めている者は非常に少ない。中国語学も修め、日本語学も修めている者が中国語話者日本語教育に携わるのが王道であると30年近い語学教育（日本語教育、中国語教育）の経験から感じている。近代の歴史に鑑みるならば中国語話者対象に日本語教育を行う者が中国語学を修めるのは礼儀のように思える。外国語も修めず、母語を教える者は何処でも軽んじてみられる。挨拶できない者が挨拶表現を教えることには嘘があるように外国語学習の苦しみと喜びを体得していない者が母語を教えるのは理にかなっていない。今まで日本語教育に従事していた者の権利を侵害する気はないが、今後はそうした方向へ向かうのが本来のあり方だと思う。

日本語、中国語の両誤用例研究、両言語研究、日中対照言語研究を行う後続の研究者が陸続と出られんことを心より切望する次第です。

【付記】本稿は日中対照言語学会第28回大会（2012年度冬季大会：2012年12月9日（日）於大阪産業大学梅田サテライト）で口頭発表する内容（予定。発表に採択された。）をもとにして作成したものである。

【注】

- (1)以下のこの項の記述は王忻(2008) pp.12-21 に負うところが大きい。
- (2)(1978.2)『日本語教育』34号 p.34
- (3) 佐治圭三(1992) p.22
- (4) 張麟声 (2001) p.134
- (5)王忻 (2008) pp.16-17
- (6)同研究会は2012年8月18日ー20日に第4回シンポジウムを杭州師範大学で行っている。会員数は523名（2012年8月現在）で第4回参加者は155名であった。
- 7) 呂才楨・戴惠本・賈永芬著 荒屋勸編（昭和61（1986））はしがき p.1
- (8) 岡部謙治編著（1990）序文（1）頁目
- (9) 来思平+相原茂 喜多山幸子編訳（1993）はしがき iii頁
- (10)同(9)
- (11) 佟慧君（1986）「説明」 p.1

【引用文献・参考文献】

- ・藤田昌志(2007)『日中対照表現論一付:中国語を母語とする日本語学習者の誤用について一』白帝社刊
- ・(1978)『日本語教育』34号(日本語教育学会)の「文法上の誤用例から何を学ぶか」という特集——6編の論文(鈴木(1978)「格助詞を中心として」、吉川(1978)「誤用例による研究の意義と方法」、佐治(1978)「誤用例の検討—その一例—」、遠藤(1978)「作文における誤用例—モスクワ大学の場合」、宮崎(1978)「誤用例をヒントに教授法を考える」、茅野・仁科(1978)「学生の誤用例の分析と教授法への応用」)
- ・王忻(2008)『中国日语学习者偏误分析』外语教学与研究出版社
- ・『日本語学』が1982年11月号から5年にわたり掲載した、複数の研究者(吉川(1982-1983)、森田(1983-1984)、水谷(1984)、稲垣(1985)、宮崎・新屋(1985-1986)、大曾(1986-1987)、田窪(1987))による誤用分析研究。
- ・吉川(1982-1983)「誤用例による研究の意義と方法」
- ・森田(1985)『誤用例の分析と研究—日本語学への提言—』明治書院
- ・佐治圭三(1992年)『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- ・市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』にほんごの凡人社
- ・市川保子(2000)『続日本語誤用例文小辞典』にほんごの凡人社
- ・張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析——中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
- ・市川保子(2010)『日本語誤用辞典—外国語学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント—』スリーエーネットワーク
- ・『日語学习与研究』が1983年1月号から1985年6月号まで13回にわたって連載した佐治圭三(・劉金才・郭勝華)(1983-1984)「誤用例の検討——動詞の誤用例」。
- ・胡振平(1986)『日語部析二百例(日本語誤用文分析二百例)』上海译文出版社
- ・穂積晃子著、顧海根・李強訳(1987)『中国人学日语常見病句分析一百例』科学普及出版社(台湾版に同(中華民國79)『中國人學日語常見病句分析一百例』笛藤出版がある。)
- ・『日語知識』に1989年5月号から12月号まで連載された青蘭編「正誤辨析」。1990年、12回にわたり掲載された森田(1985)の一部である張青藍編訳『病句分析与研究』。
- ・徐宝妹・許慈恵(1995)『留日学生日语错句解析』上海外語教育出版社
- ・呂才楨・戴恵本・賈永芬著 荒屋勸編(昭和61(1986))『日本人の誤りやすい中国語表現300例』光生館

- ・岡部謙治編著（1990）『この中国語はなぜ誤りか』1982-1983 光生館
- ・来思平+相原茂 喜多山幸子編訳（1993）『日本人の中国語——誤訳例 54 例』東方書店
- ・中山時子・佐藤光・趙閻先著（1997）『中国語表現 300 例——日本人の発想・中国人の発想』東方書店
- ・張起旺著／児玉充代訳（2001.3）『日本人の間違えやすい中国語』国書刊行会
- ・郭春貴（2001.11）『誤用から学ぶ中国語』白帝社
- ・佟慧君（1986）『外国人学汉语病句分析』北京語言学院出版社
- ・狄昌運編 岡田勝訳（1996）『怎样说得对?——日本人汉语学习中常见语法错误辨析』北京語言学院出版社
- ・楊徳峰（2008）『日本人学汉语常见语法错误释疑』商務印書館

以下は紙幅の関係で本稿で言及しなかった筆者の中国語誤用例研究、日本語誤用例研究に関する参考文献である。

- ・藤田昌志（2001）「誤用例の研究—中国語を母語とする日本語学習者の場合（Ⅰ）—」三重大学留学生センター紀要第 3 号（pp.1-12）
- ・藤田昌志（2002）「同（Ⅱ）」同紀要 4 号（pp.1-11）
- ・藤田昌志（2003）「同（Ⅲ）」同紀要 5 号（pp.29-37）
- ・藤田昌志（H. 3）「加訳（日→中）について」（大阪産業大学論文集人文科学編第 74 号所載）
- ・藤田昌志（1993）「受身文について（日→中）について」（大阪産業大学論文集人文科学編第 79 号所載）
- ・藤田昌志（1995）「日中対照表現論—転換（日→中）について—」（龍谷大学国際センター研究年報第 4 号所載）
- ・藤田昌志（1996）「日中対照表現論—減訳（日→中）について—」（龍谷大学国際センター研究年報第 5 号所載）
- ・藤田昌志（1999）「日中対照表現論—意識（日→中）について（Ⅰ）—」（三重大学留学センター紀要第 1 号所載）
- ・藤田昌志（2000）「日中対照表現論—意識（日→中）について（Ⅱ）—」（三重大学留学センター紀要第 2 号所載）
- ・藤田昌志（1994）「中国語を母語とする日本語学習者の誤用について」（龍谷大学国際センター研究年報第 3 号所載）
- ・長友和彦（1993）「日本語の中間言語研究—概観—」『日本語教育』81 所収、pp.1-18.

- ・荒川清秀(1992)「日本語名詞のトコロ性ー中国語との関連でー」(大河内康憲編集(1992)『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版 所収 pp.71-94)
- ・藤田昌志(2010)「日本語を母語とする中国語学習者の誤用について」(中国語教育学会第6回全国大会(2008年6月8日 於北九州市立大学))
- ・藤田昌志(2011)「中国語時事作文についてー日本語との対照から見た特徴・誤用ー(I)」三重大学国際交流センター紀要第6号 pp.31-41
- ・藤田昌志(2012)「中国語時事作文についてー日本語との対照から見た特徴・誤用ー(II)」三重大学国際交流センター紀要第7号(2012) pp.27-37